



実家の玄関の正面に「信・愛・望」と父が名付けた絵が掛けてありました。20号くらいですが、正確には分かりません。柔らかい、温かい色調で、幻想的な女性像です。父は三人の女性に「信・愛・望」のイメージを与え、また、三人の娘になぞらえて、左の「信」は三女の静子、真ん中の「愛」は二女の礼子、右の「望」は私の似姿だと言ったことがありました。そのせいもあって、この絵は信仰の深い意味とともに、人間味の奥深さも感じさせられ、家族一同のお気に入りの絵になりました。我が家の象徴的一枚の絵です。この絵を描かれたのは父の敬愛する石澤修悦画伯です。1955年(昭和30年)に作品頒布の会があり、そのパンフレットに棟方志功が次のように寄せ書きを書かれました。

石澤修悦氏の画業への讃記 棟方志功

青森を郷里として、出て来た、わたくし達の中で石澤修悦氏程に画業に執心かけてゐる人は、あまり知らない。あれ程まで真実なたたかいを身一杯に、いのち充分にかけてゐる人は、あまり知らない。石澤学兄の仕業のたゞならざる真実という境に連れて行かれた時、わたくしは、これは本当の仕業だと謂う事を判然と知ったのです。世の中にはマヤカシモノが随分あって、そういう、モノが案外平気な面で、仕事がマジメクサツタリしているから面白いもんです。

石澤学兄の厳しい修業は皮を切って肉を、骨をと、真業の世界に這入っている切ない本憑であることと思います。この本憑こそ天下、亦誰にもできない。この一つの道だと思います。

石澤学兄の真憑への進業へ、わたくしは、泣きながら有難く、その清冽さを拝んで行きます。

石澤画伯の絵を父はよく求めていましたので、私たちは幼い頃から馴染み、彼の絵に接しながら育ちました。彼はキリスト者でしたから、テーマは信仰の世界です。具象の部分をもった抽象的な幻想的な構図でした。マットなタッチでありながら、描かれる世界は静謐で、どこか憂いを秘めているように感じました。少女時代の私をもスケッチして、五所川原教会の講壇横のガラス絵の中に群像の一人として描いてくれました。その他、油絵や版画など、教会のために多くの作品を作られました。父は知り合いに紹介していました。東京YWCAで教えてもらいましたが、いわゆる無名の画家です。石澤画伯の絵を多くの人に見てほしいものだと願っています。



先日、殉教者聖ソフィア(-137)の記事を目にしました。ハドリアヌス帝の時代に殉教し、その祝祭日は5月15日だということです。彼女にはギリシャ語でピステイス(信)、エルピス(望)、アガペ(愛)という名の3人の娘がいました。熱心なキリスト者であるソフィアに改宗を迫るため、若い娘たちを捕らえました。拷問を受けても、娘たちは母から教えられた信仰を捨てずに死にました。母ソフィアは娘たちの墓の前で泣きながら亡くなったということです。迫害、殉教は過去の話ではないことを私たちは知っています。人の心を勝手に力づくで奪い、支配することはできないと思うのです。